

関西外国語大学ホームステイプログラム —プログラムの改善のための基礎研究の必要性—

鹿浦 佳子

要旨

ホストファミリーと留学生に対し関西外国語大学（以後、関西外大）国際交流部が行っているアンケートの結果を分析し、最近の問題の傾向を探り考察した。毎回ホストファミリーと留学生は文化、習慣、考え方の違いによる問題、コミュニケーションの仕方の違いから生じる誤解による問題など多くの問題に直面する。結果、特に文化、行動様式の違いによる衝突はホームステイ、留学生双方から毎回繰り返し問題提議されていることがわかった。アメリカをはじめ、国、地方別の留学生の行動・生活様式があらかじめパターン化されホストファミリーが知識として持っていれば、日本と違う行動・生活様式が予測でき、許容もでき、予防の対策も取りやすくなる。今後の研究課題として、国、地域などによって異なる文化の行動・生活様式をパターン化し、留学生とホストファミリー間の問題改善を目指す。

【キーワード】 留学生、ホームステイ、文化、行動様式、パターン化

1. はじめに

関西外大の国際交流部は主に短期留学の交換留学生を受け入れており、1972年の設立当時からホームステイプログラムを始め40年以上の歴史を持つ。この間一貫して留学生に実際の日本語の練習ができ、日本の生活、文化を体験できる場所としてホームステイを提供し支援してきた。知らない外国の文化、考え方、言葉などにも触れることができることから、多くの日本人家庭からも留学生受け入れの協力を得ている。留学生からは日本語が学べ、日本の生活、文化を知る上で役に立ったという高い評価を得ている（鹿浦 2007, 2008 参照）。国際交流部では、来日の前に

ホームステイの心構えを案内し、本人の意志を確認した上で、来日後、日本での生活全般に関するオリエンテーションを参加必須で開いて注意すべき点を強調している。学期末のアンケートのコメントをもとに毎回指導内容を追加している。最新のオリエンテーションで指導している点は次のような点である。

- ・コミュニケーションの大切さ。(日本語が話せなくても積極的に家族とコミュニケーションを取るように心がける)。

- ・お礼の言葉「有難うございます」や謝礼の言葉「ごめんなさい」の大切さと必要性

- ・何か失敗をした時、壊した時は正直にホストファミリーに話すこと。

- ・ホームステイのルールは守ること。

- ・自己都合による外出時の食費・交通費は自己負担であること。

- ・帰宅時間の変更や食事がいるのか要らないのかの連絡を必ずすること。

- ・始めの面談の時に現金を用意しておくこと(定期券購入などのため)。

- ・入浴の仕方。トイレ、洗面所の使用マナー。

- ・洗濯物をお願いする場合、こまめに出して溜め込まない。

- ・ゴミの分別。

- ・節電、節水について。(電気や冷暖房をつけっぱなしにしないで服で調節)。

- ・パソコンの使用時間や使用時の注意(退出時にはスリープモードではなく、電源を切るように)

- ・アレルギーや宗教上の食事制限がない限り、出されたものは食べてみる。

- ・食べられないものがあれば、始めの面談の時に伝えておく。食べ残しをしたりペットにあげない。

- ・日本では風邪や病気の予防のために手洗い、うがい、マスクの着用をする。

- ・畳、寝具の取扱い(入室の際にスリッパを脱ぐ、布団の上には靴を置かない)

- ・自転車の乗り方など交通ルールを含めた安全面の指導。

これらのほとんどが、日本の文化的、生活行動様式の紹介である。

国際交流部は学期中の問題が生じた場合、留学生と家庭の間に入り調整を図るのはもちろん、学期末に留学生、ホストファミリーの双方にアンケートを行い、問題点を見つけ、プログラムの改善につとめている。留学生にはオリエンテーションで

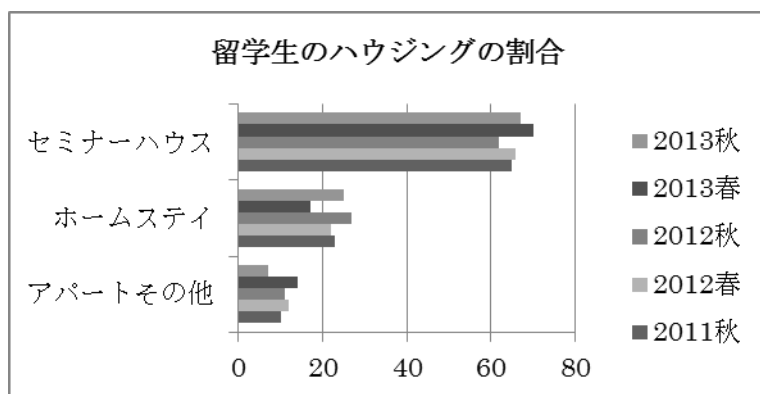
このような改訂を重ねた注意事項を説明しているにも関わらず、毎学期ホームステイの家族から要望として繰り返し挙げられ、問題件数も減少しない。

今回過去4学期のホストファミリーのアンケート結果を項目ごとにグラフにして傾向を見た。留学生のコメントはコメント形式で回答数も項目も少ないため、ホストファミリーのアンケート結果報告のところに目立ったコメントを追加記載する。

ホストファミリーのアンケートの回収率は、ほぼ 100%である。留学生の方は学期が終わるとすぐ帰国したり、旅行に行く学生が多いため、アンケートの回収率は低い。経験上、提出しない留学生には問題がなかったという傾向がある。

ちなみに、関西外大の留学生はホームステイをする学生、大学の留学生寮（セミナーハウス1番～4番）に住む学生、オフキャンパスのアパートに住んでいる学生と分かれている。過去5学期のハウジングの割合は学生寮とホームステイとアパートでは、大体7対2対1という割合に落ち着いている。（表1）2013年秋学期の場合、全留学生375人中、寮に253人、ホストファミリーの家に95人、アパートに27人住んでおり、ホームステイをした留学生は全体の2割強だが、留学生の全体数が多いため、実際は約100もの日本人家庭に留学生を預かってもらった。国籍は様々であるが、各学期、アメリカが一番多い。

表1



2. 家族へのアンケート

2.1 アンケートの結果

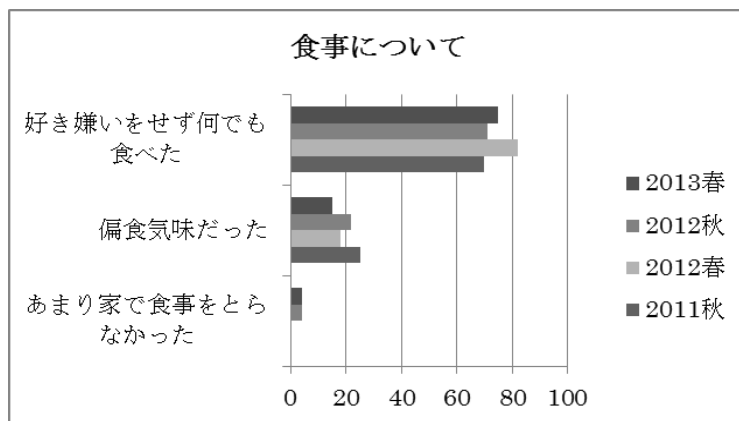
2.1.1 食事について

原則、朝、夜はホストファミリーの家で食べるようになっており、留学生がホー

ムステイを選択する2番目の理由が日本の文化食文化に接したいというものであり、一位の日本語を学びたいという理由に次ぎ、ホームステイをする大きな要因となっている。(鹿浦 2007, 2008 参照)

表2で示されるように、作ったものは残さずなんでも美味しいといって食べてくれたという意見が8割あった。中には残さなかったため食べ過ぎて胃腸炎になり病院に行ったという事例もある。留学生は残すと失礼になると思ったのであろう、言葉でも何といえよいか分からなかったようだ。偏食気味だったという意見の中にはアレルギーの理由から食べられない食材や、宗教上の理由から食べられない豚肉のようなものは仕方がないとして、嫌いなものがある場合、時間をかけて工夫してメニューを作ったと答えた家庭も少なくなかった。しかし、嫌いなもの、食べられない物を事前に言わずに残し、陰で捨てていたのが分かった時はいい気がしなかったという意見も目立った。食事については殆ど肯定的な意見であった。ほぼ美味しい、異なる食文化を学ぼうという姿勢がよく見られた。

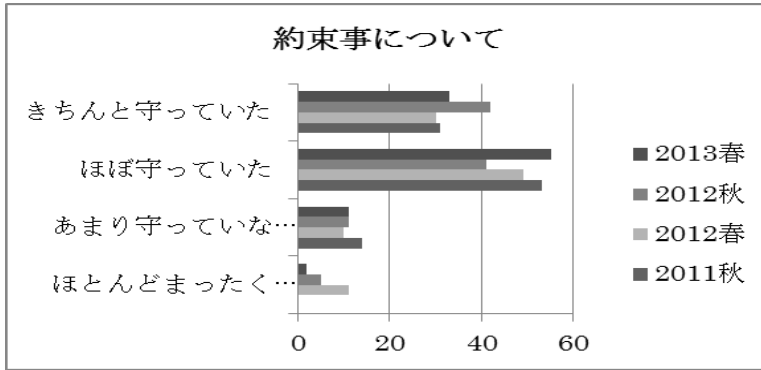
表 2



2.1.2 約束事について

約2割の留学生が門限、食事の時間、ゴミ出し、部屋の掃除、英語を教える事、鍵の扱い、友人の招待などについてホストファミリーと約束をしたにも関わらず、守られていないという結果が出た。問題が起こった時話し合いをしたが、日本語だけでなく細かいことが伝わらないし、英語だけだと不十分で、解決できないまま、お互いにしこりが残ったというケースが多かった。

表 3

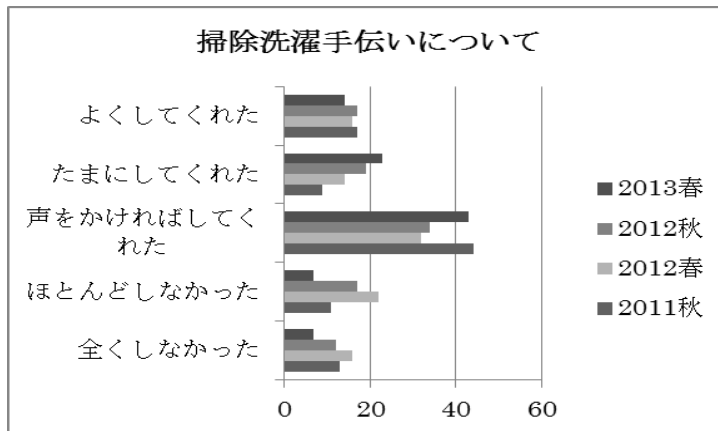


2.1.3 掃除・洗濯・手伝いについて

留学生の個室の掃除は本人次第であるので、例えば週一回掃除をする取決めになっても留学生が行わないため、匂いが気になると言ってやっと掃除をするようになったというケースがあった。ベッドの生活様式の国から来た留学生は机で勉強せずベッドの上でするので、文具で寝具が汚れて困ったという例があったが、これも予め知っていればカバーをするなどの対策が取れる。皿洗いなどの手伝いはどんな作業があり、何をしたいのか分からないという留学生のコメントもあった。

自分の部屋の掃除はするが、手伝いは声掛けをしなければしないケースが多かった。声掛けも英語でどう説明すればよいか分からず、手伝いもどこまで頼めばよいか分からないので手伝いはしていない留学生が多い。

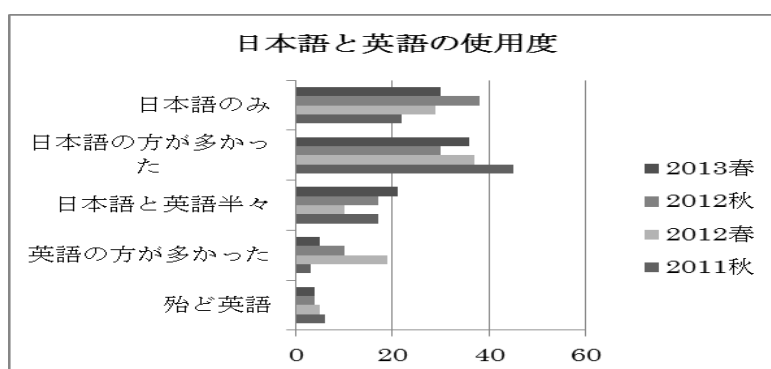
表 4



2.1.4 日本語と英語の使用度

「日本語のみ」、「日本語の方が多かった」を足すと、約7割の留学生在がホストファミリーと日本語を使用しようとしていたことになる。ホームステイをしようと思う留学生の動機的一位は「日本語を上達させたい」であるので（鹿浦 2007 参照）、この割合は留学生も努力している表れであろう。英語と日本語が半々というのが約2割で、約1割が英語の方が多という回答であった。留学生の日本語のレベルが低く、ホストファミリーの中に英語が上手に話せる人がいる場合、このようなケースとなる。

表 5

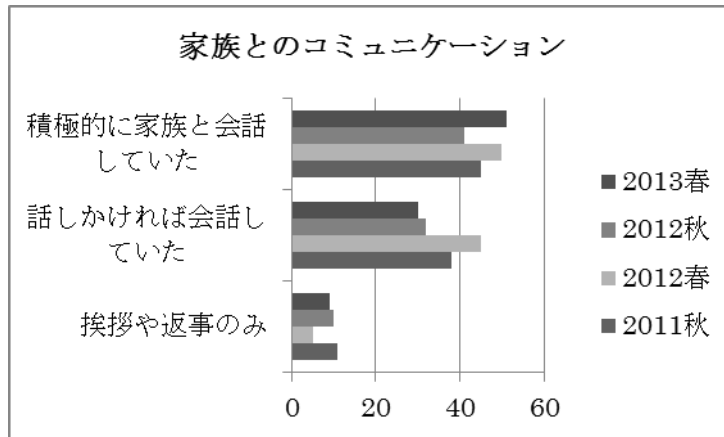


2.1.5 家族とのコミュニケーション

留学生は大体半分の学生が家族と積極的に話そうとしていることが分かる。3割から4割の学生が受け身ではあるが家族とコミュニケーションを図ろうとしていたことが分かる。しかし、約1割の日本人家族は挨拶や返事のみで留学生が関わりを持とうとしなかったと回答している。「ただいま」「ってきます」も言わないため、家にいるのかいないのかも分からないほど、会話がなかったというケースもあった。「いただきます」「ごちそうさま」など、日本語は決まった挨拶があるのに対して、決まった挨拶表現のない留学生は、「行ってきます」も言わない失礼な人に映るのかもしれない。

留学生のコミュニケーションに関してのコメントは殆ど肯定的だった。しかし、日本人家族が話していることとと思っていることと、多分違うと感じる留学生もいた。また特別扱いされて、家族であれば叱られるところ、自分は叱られず家族の一員としてみなしてもらえず孤独感を感じる留学生もいた。

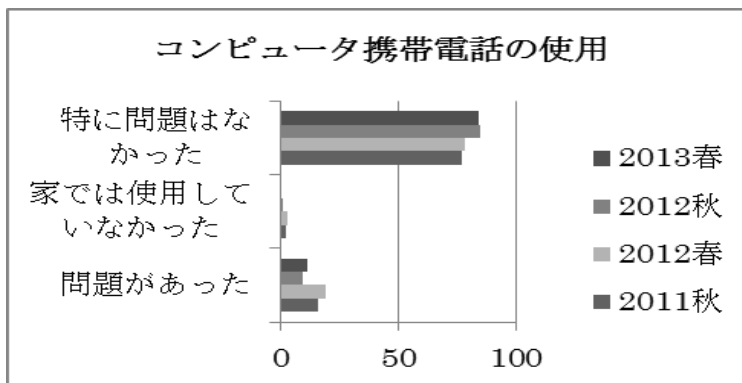
表 6



2.1.6 コンピュータ、携帯電話の使用

スカイプを用いて居間で大きな声で話したり、ゲームや勉強などの目的でコンピュータを時間や時間帯を考慮せず無制限に使用するという問題が多かった。最近は無線ランが使用できるため、一人で部屋に閉じこもってゲームやスカイプをし、家族とのコミュニケーションの時間がなかったというケースも多くみられる。留学生はプリペイドの携帯電話があるため、固定電話の使用代金未納などの昔よくあった問題はなくなった。食事の時間の約束の変更など連絡が容易にできコミュニケーションが取りやすいはずだが、連絡を怠ると却って人間関係が悪くなる。

表 7



2.1.7 生活態度

「あまりよくなかった」「問題が多かった」を足すと、約 1 割の留学生の生活態度に問題があったとホストファミリーは答えている。

朝大学に間に合うように規則正しく起床、門限も守るという学生が殆どであったが、夜型の学生は、朝寝坊をし、決めた朝食の時間を守らないなど、家族での規則が守れない事態に繋がり問題となっているケースが多い。また、許可なくシャンプー・コンディショナーなどの備品の使用などの問題があった。

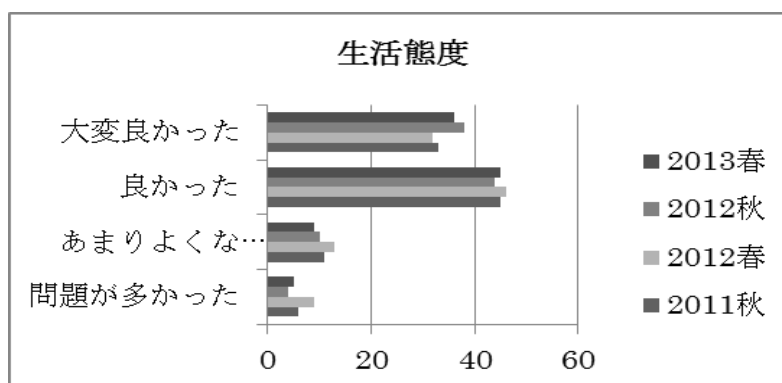
外履きのまま家に入る、スリッパでの和室へ入室する、ゴミの分別法や風呂の入り方、洗面所の使い方が悪いという意見は、毎学期必ず多く寄せられる。鍵を渡すかどうかは家庭によるが、留学生がよく行う鍵の紛失や、自転車のライトの破損など、家の物を破損した後のトラブルも問題になっている。

風邪を予防するための、うがいや手洗い、時にはマスク着用は日本人にとってはあたりまえであるが、そのような習慣のない留学生には理解できない。うがいや手洗いをせず家の中で、くしゃみ、咳を堂々と行い、家族のうちだれかが風邪をひいた時、責任問題となったというケースもある。

留学生が風邪をひいた時や病気になった時には常備薬を飲ませてよいものかどうか、どう対処すればいいか困ったという例もあった。

生活習慣がわからず、特に食事のマナーやお風呂の入り方、使い方もわからず困ったという留学生は多い。それらを知っていれば、生活がスムーズでより快適だったと述べている留学生も毎学期数人いた。

表 8



2.1.8 ホストファミリー、留学生それぞれの満足度

ホストファミリー、留学生それぞれに全体的な満足度を聞くと、留学生は「very satisfactory」が平均 8 割、「very satisfactory」と「satisfactory」を足すとほぼ 100%となるが、ホストファミリーでは「大変有意義であった」という家庭は約 3 割で、「有意義であった」は約 5 割で、1 つ 2 つの問題点をあげているホストファミリーは「有意義であった」と回答している。ホストファミリーの留学生に対する否定的な意見は約 2 割もあり、留学生より不満度は高いことが分かる。

表 9

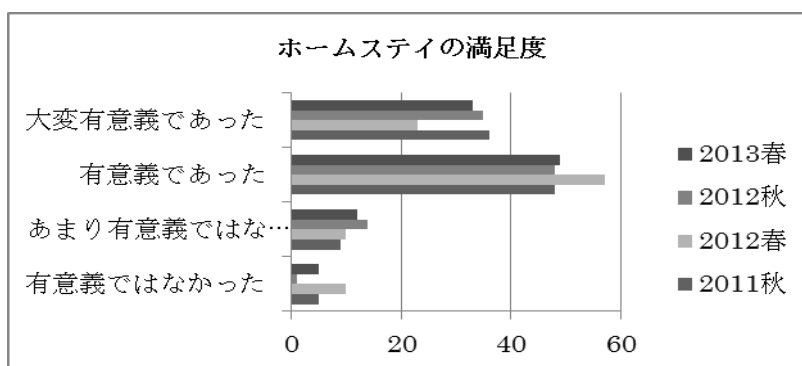
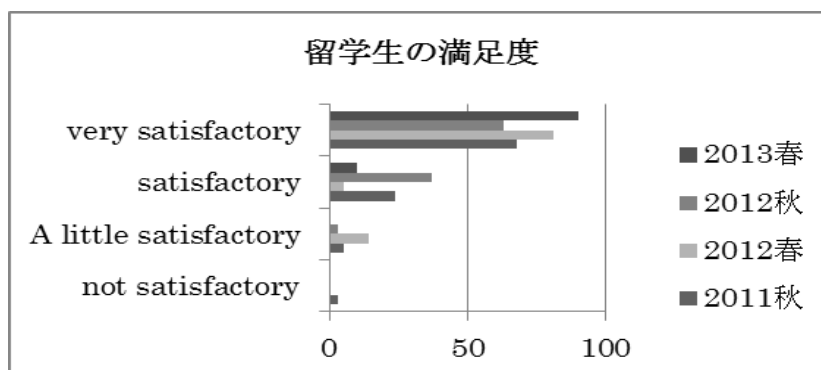


表 10



2.2 毎回共通して見られる問題

ホームステイを始める前に留学生には参加必須のオリエンテーションにおいて注意事項を指導しているにも関わらず、ホストファミリーからはオリエンテーションで説明してほしいという要望が絶えない。オリエンテーションでの制約された時

間と留学生があまり頓着していない理由が考えられる。各学期にアンケートの集計と問題事例とコメントの抜粋がホストファミリーに送られて他のホームステイが抱える問題点を把握するが、ホストファミリーは留学生を受け入れて初めて同じ問題点を感じ指摘する。留学生に日本の典型的な生活様式に注意するよう示しているように、ホストファミリーにも生活様式の違う国や文化から来た留学生についての情報を載せたマニュアルのようなものが必要なのであろう。

実際に留学生の国の基本的な考え方が分からないので、勉強しなかったというホストファミリーからの意見も多く寄せられている。

毎学期、同じような問題が同じ割合でホストファミリーから提出されている。留学生との話し合いなどのコミュニケーションを通して解決できればいいが、言葉の問題や相手の言葉を使用しても表現のニュアンスの取り違いなどから問題解決は難しい場合が多い。また、欧米の留学生は、家庭内であっても子供のうちから個人の自主性が重んじられておりいちいち家族であっても他人から指示をされることに抵抗を感じる。行動した後、文句を言われる事には子供扱いされて抵抗を感じるようだ。日本人はいくら注意しても改善しないとさらに不信感を持つ。かといって始めに両者間ですべてのルールについて取決めるのも家族的な雰囲気壊しかねない。

お互いの考え方が変だ、失礼だと感じた場合、お互いの文化や生活習慣を知り、理解する努力が求められる。しかし、言葉の壁などの障壁がありコミュニケーションが取れない場合、お互いを知り理解することが難しくなる。

もし頻繁に起こる問題が、留学生の個人的な問題ではなく、文化や習慣などの行動パターンが違うためにおこしてしまう問題だということを理解すれば、規則を守らない、謝罪がされないからといって、ホストファミリーもさほど深刻な問題にすることはないのであろう。例えば、あまりエネルギー問題に関心がない国では、お湯や冷暖房を好きなだけ使用し、あまり傘を差さない国では、濡れた服や靴下のままで家に入るのは普通である。靴を履いたまま家に入る生活様式であれば、靴をはいたまま入室し、ベッドの上に座るのは悪いマナーではない。ましてや裸足で外に出て足を拭かずに家に入ることには何の罪の意識もない。これらのことを知っているだけで、相手を理解でき、憤りも弱まる。

留学生からは、反対にホストファミリーから日本の文化習慣を知りたかったが出

来ずに残念だという以下のような意見があった。

- ・ 食事中のマナーや日本の習慣を知っていれば、日本での生活によりスムーズに慣れることができた。

- ・ 言葉を理解できても、本当に家族の人たち考えていることを読み取ることができない時が多くあった。

- ・ 生活感が全く違うので時々どういう行動をとればいいのか分からなかった。

個人的な生活態度の違いは別として、留学生もホストファミリーも双方が国や文化による生活様式、生活態度の違いをあらかじめ知っていれば、生じるコンフリクトも小さくできる。

3. まとめ

初めて留学生を預かるホストファミリーは、留学生の考え方、文化がわからず戸惑う場合も多く、留学生を預かった経験のあるホストファミリーは留学生の生活態度、行動様式が違うということが分かり、それを前提としてルールの取決めや注意の仕方も適切なものになっているようだ。但し、慣れ過ぎて、ルールの取決めを怠ったり、それまでと異なる国や地域の留学生を預かる場合、前提や期待値が異なり、問題はおこっている。違う文化、行動様式の留学生と初めて接する場合は、その国、地域の文化、習慣、行動様式の知識があると、相手を許容できる部分が大きくなり、お互い理解し合うことが容易になる。言葉の意味が理解できても、本当の家族の人の考えていることを読み取ることが出来ないという留学生がいるように社会言語学的な日本語の運用も留学生には必要となる。

留学生の国、地域の宗教、文化からくる生活態度などの行動様式を特定して、留学生を預かるホストファミリーに提供すれば、いつも出てくる否定的なコメントも少なくなると思われる。留学生の出身の国と日本それぞれの、文化的な生活様式、行動様式をパターン化して、皆が共有できるような基礎研究を今後の課題としたい。

参考文献

鹿浦佳子・武田千恵子（2000）「ホームステイの功罪とホームステイプログラムへの提言」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第10号 pp.35-50

鹿浦佳子（2007）「ホームステイにおける日本語学習の効用—ホームステイ、留学

生、日本語教員の視点から一」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第
17号 pp.61-112

鹿浦佳子（2008）「ホームステイする学生は成績がいい！ホームステイをすると成
績が上がる？」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第18号 pp. 99-134

鹿浦佳子（2009）「ホームビジット・プログラム報告—留学生支援プログラムを考
える一」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第19号 pp.53-62

(shikaura@kansai.ac.jp)